ゆるくて気ままなプロデュース。

ますたー

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

芸能界を目指して居るゆるふわ青年日向（ひむかい）さんが、ちひろさんに振り回されながら、ゆるふわな少女たちをプロデュースする、

ほのぼのとしたお話。

目次

〜ST@RT THE STORY〜 ―――― 1
ST@RT STORY 〜side T〜 ―――― 4
ST@RT STORY 〜side H〜 ―――― 7

～ＳＴ@ＲＴ　ＴＨＥ　ＳＴＯＲＹ～

某月某日。
某所…では味気ないので、ここは敢えて場所を言わせてもらおう。
３４６（ミシロ）カンパニーの常務室。

女性「新人プロデューサーが、アイドルの卵に猥褻行為をしたとの情報を受けたのだが、其方は対処し終わったそうだ。…ああ。一つ空席が出来た。君の推薦の彼を新しく出来た場所へ送ろうと思う。…うん。…問題はないだろう。何せたくさんのプロデューサーを物としてしか見なかった君の推薦だ、相当な腕なんだろう。…何？……ハハハハハ！そうか…そうだな！それは面白い…ならばこの子達を送ってみるか。サポートは頼んだぞ……『千川』」

ｓｉｄｅ　？

少し時間を遡り、渋谷のとあるレストランにて。
僕は緊張でガチガチだった。何せ高校時代の憧れの先輩、千川ちひろ先輩に急に呼び出しをされたのだから。
当時、吹奏楽部で飛び抜けて上手だった先輩。自分で言うのもあれだが、僕も上手い方だとは思っていた。それ故か、先輩のお気に入りだったらしい（この事は吹奏楽部の仲の良かった女子が教えてくれた。）
月日は流れ、今や5年経ってしまってはいるが、時々、メールが来るたびに喜んでいる僕がいる。
そんな先輩に呼び出しを受けたら、緊張しないほうがおかしい。
そんな時。レストランのドアが開いて、憧れの横顔を拝むことができた。
この後、僕の人生が変わる大事件があるとも知らずに。

ｓｉｄｅ　？

今日は高校時代のお気に入りの子、日向（ひむかい）葵（あおい）に会う日。

あの時からどんな風に成長したのか気になります♪

待ち合わせ場所は、渋谷のとあるレストラン。私のお気に入りのレストランなんです。さて、お店に入りますよ～。

？「予約した千川です。」

店員「千川さん、お久しぶりです！最近はやっぱり忙しいのですか？」

千川「そうですね、でも暫くは暇になると思うので、適度に足を運ばせていただきますね♪」

店員「そうですか。お待ちしております。あぁ、待ち合わせの方は彼方にいらっしゃいますよ。」

あ、注文は何時ものですか？」

千川「あ、彼来てます？それと注文は何時もので♪」

店員「かしこまりました。」

こうして私、千川ちひろは、お気に入りの子、日向　葵君の元へ足を運ぶのでした。

ｓｉｄｅ　二人

千川「久しぶり、葵君。」

日向「お久しぶりです！千川先輩！」

日向は堅苦しく返して来る。相変わらずだなぁ。などとちひろは苦笑う。そんなちひろの心の中に、悪戯心が湧くのは仕方ない事だろう。

千川「そんな硬くならないでよ、ゆるふわヒマワリちゃん♪」

（補足すると、ヒマワリは漢字で向日葵と書く。）

日向「んなっ！／／／何人の闇に触れてるんですか!?」

相変わらずだ。この手の話になると急に恥ずかしがる。

可愛いのに。可愛いのに。

千川「マァマァ、今回はちょっとした相談なんだけどさ、ヒマワリは、芸能界に入りたいんだよね？」

日向「ヒマワリ…まぁ、目指してますけど…？」

千川「ならさ…

プロデューサーになって見ない？ヒマワリちゃん」

ＳＴ@ＲＴ　ＳＴＯＲＹ　～ｓｉｄｅ　Ｔ～

路地裏のカフェ
ｓｉｄｅ　？
「はぁ…またダメだったのかな…才能ないのかな、私。」
誰にも聞こえないように呟いてミルクティーに、手を伸ばす。
程よい熱と甘みが私を慰めるように染み渡る。私、高森藍子は、小さな頃から芸能界…その中のアイドルに興味を持っていた。
１６歳になって、いろいろな事務所に面接に行ったけど、一つも受かったことがない。そろそろ本格的にやめてしまおうとも思って居る。
そんな時だった。私のお気に入りの携帯に着信が入って来たのは。
「この番号…誰だろう？もしもｓ「初めまして、高森藍子さんであっていますか？」あっ、はい！そうでｓ「このあとお時間ありますか？」
大丈夫でｓ「では、○○で待っています。」

ツー…ツー…ツー…
「切れちゃった……誰だったんだろう？とりあえず行ってみようかな。」
そんなこんなで、私は待ち合わせ場所に赴くのでした。

ｓｉｄｅ　日向＆千川
あれから３週間が過ぎ、就職手続きや、千川先輩の講座を受けて、晴れてプロデューサーとして３４６プロに就職できた。
でもそれは２週間で終わり、残りの１週間はというと、
～１週間前～
日向「よし！仕事がんばりまｓ「仕事は今はありませんよ？」千川先輩!?何故ここに？会社に帰らなかったのでｓ「違います♪今日からここが私の仕事場です♪」えっ？ええ?!」
この先輩、やはり解らない。
日向「それはいいとして、やっぱり癖は治ってないみたいでｓ「何

がですか？」
日向「さすがｓ斬りのちひろ先輩…」ボソッ
ともかく、１週間仕事はないらしいので、部屋を掃除しようにも、
鏡のように磨かれた床…
透き通る青空を曇り一つ無く透かす窓…
どうしよう!?やること一切ない！
という事で、街探索に行くついでにスカウトしてみよう！

そして、何事もなく1週間が経過し、そろそろこの街を知り尽くしそうになって出社した頃。
千川「待ってましたよ。今日は初めてのお仕事です！」
日向「待ってました！で、何をすれば？」
千川「本日、このプロダクションに、アイドルの卵が来るので、案内等をお願い致します。」
日向「私で務まりますかね？その仕事。」
千川「大丈夫。多分すぐ『プロデューサー』さんと仲良くなれますよ！」
その後、他愛もない会話が続き、時間ギリギリになったのは言うまでもない。

ｓｉｄｅ？
来ちゃった。来ちゃったよ。来ちゃいました。
なんでパニックに陥って居る私は他の人の目からはさぞかし滑稽に見えるだろう。
とりあえず、右往左往しても仕方がないので、中の、指定された階層に行ってみる。ここは都内のとあるビルで、この近くにある公園に

は、よく足を運んで居る。というか、この近くの住宅街に住んでいる。
閑話休題。
とにかく、呼ばれたんだ。行ってみよう。
コンコンコン…木のドアを叩く。
日向「ようこそ！プロダクションへ！高森藍子さん！」

軽快な声と共に、明るくて元気のいい…それでいて癒されるような…そう。まるで向日葵のような笑顔が私の眼前に広がった。

ここから、平凡だった私の辛くて少し悲しい、けど、それ以上の楽しみと喜びを運んでくれる幸せな人生が始まる。

ＳＴ@ＲＴ　ＳＴＯＲＹ　～ｓｉｄｅＨ～

ｓｉｄｅ　？

死のう。もう死んでしまおう。

そうゆう狂った考えを頭に、私はとあるビルの屋上に辿り着く。

ここから落ちれば…落ちて仕舞えば楽になる。

さよならみんな。サヨナラワタシ。

「危ないッッ！」

そう聞こえた気がした。　でも私の意識と身体は暗い昏い、漆黒の闇に堕ちて逝った。

はずだった。

ｓｉｄｅ　日向

高森さんとの出会いからしばらく経った今、僕はビルの屋上に来ています。なにがあったのか？こんな深夜に一人で男が、グロッキーな顔をしているのかというと、高森さんとの会話をしていると、何故かいつの間にか平気で２時間ぐらい経っている。

そんなこんなありまして、残業でございまする…

「はぁ…あと少し、頑張りますかぁ…」

そうやって、事務所に戻ろうと、回れ右して

見てしまった。

高校生位の女の子が、『屋上のフェンスの向こうで、立っていた』

頭より先に身体が動いた。自分でも信じられない位の速さで、女の子の元へたどり着いた。

けど女の子は、既に前傾姿勢になってしまっている。

思わず叫び、手を限界まで伸ばした…

「危ないッッ！」

間に合った…。

間一髪、女の子を助ける事が出来た。

フェンスの向こう側から頑張って引っ張り上げて顔を見ると、痩せ細っていて、目を閉じていたが、息はある。まだ生きている。

それだけではあまり安心が出来なかった。

少なくとも、今この子は自殺しようとした。

そんな子を放っておける訳がない。

けど此処ではなにもしてはあげれない。

仕方がないので、この子を事務所に運んで行った。

ｓｉｄｅ？

目を開けた。外はまだ真っ暗だ。

…なんで私は生きているの？

飛び降りてからの意識がない。此処は自分の家かと思ったが、全く見知らぬ天井だった。死に損ない、病院に運ばれたのかと思ったがそれすらなさそうだ。
周りを見渡して見ると、一箇所だけ、そこだけ電気が付いていた。興味本位で行って見る。どうせ死に損なった身だ。
どうなろうと構わない。

そこには一人の男性が居た。必死に何かを書いている。
と、私に気がついたみたいだ。男性が寄ってくる。
普通なら恐怖を覚えるはずだが、自殺未遂の為か、全く怖くなかった。
男性「目は覚めたみたいだね。」
男性は少し困った顔をして居た。
何故だろうか？私を監禁して、そうゆう事をしてしまおうという顔では無い。
男性「先ずは座りなさい。私は日向葵。君の名前は？」
男性は近くにあった椅子を進めて、向かいに座った。
？「私は…名乗る必要は無いよね…どうせ死ぬんだし。」
自嘲的に鼻で笑い、下を向いた。
仮に此処で前を向いて居たら私は恐怖で泣き喚いてしまうであろう。
ちらりと見た目の前の男性は、怒りの全てを使った目をして居た。
恐怖で手が震えた。歯がカタカタ音を鳴らすくらい震える。
男性「何故…何故あんな事をしたんだ。」
声はかなり怒っているが、何処か優しさを含んだような声だった。
私は両親に見捨てられ、友達だった人にも裏切られた。いや、そもそもの話、友達ですらなかったのかもしれない。
そんなこと言える訳がない。言っても鼻で笑われておしまいだ。
男性「だんまりか……まぁ、いっかぁ。とりあえずこれ食べなさい。」
目の前に、梅のおかゆが運ばれて来た。

男性「君は、見た限り、暫く口になにも入れてないだろう？ゆっくり咀嚼して食べなさい。」
暖かそうで、美味しそうな香り。
それだけで涙が出て来た。こんなに優しくされたのは初めてだ。
？「食べて…いいですか？」
泣きながら聞いた。聞いてしまった。さっきまでの死への執着は、おかゆの蒸気と共に宙に消えてしまったらしい。
男性「ああ。ゆっくり食べなさい。」
この人なら私を受け入れくれるだろうか？
かすかな期待と、不安が同時に現れた。
でもまずは言わなくてはいけない事がある。
？「…んだみお…」
男性「え？」
「本田未央です…」
それともう一つ。
「頂きます…」

ｓｉｄｅ深夜の事務所。
日向「その決意は固いのかい？」
本田「はい。此処に置いてくれませんか？…勿論、なんでもします。掃除でも、作業でも、まくらしｇ「大馬鹿者。」」
日向「…わかった。君の両親には電話を入れておくよ。」
本田「自分でやります！その位のけじめ、付けます。」
その後、なんやかんやあって、本田未央は、うちの事務所で匿うことになった。
ちひろさんにも経緯を話し、了承を得た。
尚、本田両親は、「出て言ったのだから、帰って来てもらっても迷惑だ。」

と言ったらしい。ひどい親もいたものだ。
因みに、本田未央の家だが、私の隣の部屋を借りた。また自殺未遂をされても困るし、監視、と言えば聞こえが悪いが。
そんなこんなあって、事務所にもう一人増えた。
近い未来、高森さんと、本田さんが、百合カップルになるのは誰もが予想できるぐらい二人がわかりやすい反応を取ってくれたのはいい思い出になりそうだ、